私の探鳥地（５）(野鳥だより 64 号 1986 年 6 月)

石狩浜、わが家をブラインドにして（石狩市）

黒 田　晶 子

石狩川河口の本町に入るすこしてまえ、海と川にはさまれた細長い砂地に、私がはじめて旅のテントを張ったのはいまから 7 年まえの 6 月。はげしい風と、波と、カエルの合唱に圧倒されて眠ったあくる日は、草かげを出入りするシロチドリの雛や、イソシギの賑やかな追いかけっこを眺めてすごしました。テントのひもにコウボウシバなどの長い葉が巻きついてとれないのを、風のいたずらか、人のいたずらか、いぶかったりしてー？

いずれのいたずらだったにせよ、テントを張った地にこうして手づくりの家をたてて暮らすことになりましたが、暮らしは何だかテント時代とあまりかわりがありません。ソラ！鳥の声がきこえた、といっては窓ぎわに立ち、ときによって雁であったり、白鳥であったり、アオアシシギや、チュウシャクシギであったりするその影を追い、屋根をこえるのを仰いでから、急いで反対側の窓へ走って（四方に窓があいているのでいそがしい）見おくると、という具合です。

西は海までの間に小さな沼をひかえ、北の窓側には柏の海岸林の片鱗をのこすこの家の、鳥経験はけっこうスリルにみちていて、嵐のあとにトウゾクカモメが飛んでいたり、元旦から海側正面にオジロワシが控えていたり渡りの季節にはミヤコドリが浜に佇んでいたり、なかなか油断がなりません。

それが 6 月の朝ですと、私はまず暗いうちから、カッコーの声に起こされます。その緊迫した大声は、とても「春眠あかつきを覚えず」どころではありません。カーテンのかげからのぞいてみると、案の定、二羽の鳥が翼を垂らし、尾をキリキリと高くあげた緊張した姿勢で鳴きかわし、しきりに移動しあい、蝶のようなもつれ飛びを演じ、時にくちばしに木枝か何かの小片をくわえたりしています。潮騒をバックに、アカハラ、ヒバリの声も響きます。空が明かるむにつれて、アカモズの背が照りはえ、ノビタキの紋付きがアレチマツヨイグサの茎を飛びかいます。砂丘のかげの、古い杭にとまっているのは、チゴハヤブサです。そろそろ朝食のしたくを、と思って流しに立つと、二羽のカモが沼におりるのが見えました。肉

眼でも白い眉斑がオーバーなつけまつげのように顕著な、シマアジで、二、三日まえにここで確認したものです。この沼には、先日数日強風がつづいたあとに、五羽のヒレアシシギが降りていました。夕方にはカイツブリの声も聞こえました。

浜の野原の常連は、既述のはかに、ハクセキレイ、ノゴマ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメなどです。沼の周辺が乾いて柳がひろがるにつれて、シロチドリ、シマセソニュウは来なくなりました。

いま石狩町は、わが家のとなりに火葬場の新改築を計画中です。江戸時代のやしろや古い歴史の名残りをとどめる河口の一画に、自然の築いた砂丘を崩して、二百坪の建物をうちたて、海水浴客の背後に高い煙突をニョッキリ立てる構想は、石狩浜のイメージと自然の破壊にもつながります。町は、周辺の町内会の反対を押しきって実行する構えのようです。石狩浜を愛する方々、どうぞわが町内会にご声援をねがいます。